

SONRISA

そんりさ

Vol.157



ニカラグア大西洋岸、ホンジュラスとの国境を流れるリオココ

ニカラグア・ワスパンの今

- 02 ニカラグア ワスパンの今とワンキ・タグニ活動 …新川志保子
- 04 ワスパンにおけるドキュメンタリービデオ支援 ……池田佳代
- 07 ホンジュラス ベルタ・カセレスさん殺害 …………… 伊香祝子
- 10 ゲリラと軍が共同作業をするコロンビアの村 ……訳・大西裕子
- 12 『アステカ王国の生贄の祭祀一血・花・笑・戦』 ……岩崎賢
- 14 メキシコの食「トウモロコシとインゲン豆サラダ」
…………ミゲル・アクーニャ
- 15 ニュースクリップ ……サザエ

ニカラグア ワスパンの現在と ワンキ・タグニの活動

新川志保子

今年4月におおた市民活動推進機構による企画により、ニカラグアの北カリブ自治地域RACNのワスパンで、現地のミスキート女性組織ワンキ・タグニをカウンターパートとして、ビデオ制作の研修を行いました。講師はここに報告してくれたレコム会員でもある池田佳代さん、そしてこれに協力してレコムより新川が通訳として同行しました。

ワスパンはこれで4回目、2年ぶりの訪問でしたが、前回行った時と比べて変わったことがいくつかありました。まず、自治地域の名称が、大西洋岸北部自治地域RAANから北カリブ自治地域RACNと変わっていたことです。もともとニカラグアの大西洋（カリブ）側には南北二つの自治地域があり、それぞれの名称のうち大西洋がカリブに変わったものです。この地域は通称コスタと呼ばれています。

ワスパンが属していたテリトリーも変わっていました。コスタには複数のコミュニティで構成されるテリトリーがあり、それぞれがテリトリー政府をもっています。ワスパンはそれまで属していたテリトリーから独立し、ワスパン市のみで新しくワンキ・アワラ・クピアというテリトリーを発足させたのです。

もともとのテリトリーはミスキート政党であるヤタマ（注）の影響下にあったのですが、自らの利益を追求して人々のために重要で緊急な問題に取り組もうとしないヤタマにうんざりしたワスパンの住民が、独立したテリトリーを作って自治を推進しようとしたのでした。

テリトリーの長は選挙で選ばれ、ワンキ・タグニの代表でもあるロス・カニングムさんが選ばれていました。テリトリーとして成立したのは3年前ですが、国の予算がついたのは今年からです。今年1年の予算は70万コルドバ（約300万円）で、ずいぶん少ないですが、これをまずはテリトリー政府の組織強化に使うことに

なっているそうです。私たちの滞在中に、テリトリー集会が行われ、ロスさんが皆に予算の額と使途を説明していました。行政体であるワスパン市と、主に土地と資源についての決定・管理権を持つテリトリー政府というようにおおまかな役割分担はありますが、水の問題やゴミなど双方に関わる問題もあり、現在の市長がヤタマであることから、この二つがどのように協力していけるのかが課題です。

スマホのパイロット・プロジェクト

ワンキ・タグニは精力的に活動を行っています。私たちの滞在中にも、スマホを使った人権監視プロジェクトというパイロット・プロジェクトを立ち上げるということで、リオ・ココ流域の21コミュニティの代表60人を招いた大きな集会を開催しました。米国の団体の支援でスマホとラジオ、そしてソーラーと手動を組み合わせた充電器を購入し、コミュニティの代表にそれぞれ1セットを渡して、その使い方を覚えてもらうというものです。ここ数年、中央政府の政策で、リオ・ココ周辺のコミュニティでインターネットが使えるようになったのを利用するというアイデアです。麻薬密輸のルートになっていたり、以前から多いDVなど女性への暴力に加えて、近年は少女を拉致して売り飛ばす人身売買も増えており、人権侵害が多いのです。これを防ぐために、何か起こったらすぐに写真やビデオを撮り、証拠を残す、そしてそれをワンキ・タグニなどに送って緊急に対応が取れるようにしようというものです。3日間の集まりは、スマホだけでなく、夜は歌や踊りもあり、普段顔をあわせることがないコミュニティの人たちの交流の場、問題を共有し、意見交換をする貴重な機会でもありました。この後、参加者はそれぞれのコミュニティに戻り、この後3カ月たってからまた集まって、スマホがどのよう

に役に立っているかを検証するということでした。うまくいけば、これを全コミュニティにまで広げたいということです。

深刻な水問題

ビデオ研修では、地域でもっとも重要な問題として水の危機が挙げられましたが、このスマホの集会ではそれを改めて認識することにもなりました。以前は舟でワspanまで一日で来ることができた上流のコミュニティからの参加者が、今回は水位が低すぎて舟を漕げない場所がいくつもあり、そこを通るために舟を降りて引っぱらねばならず、結局三日がかりで到着という事態になったことです。そのために予定していた日に集まりが開催できず、しかし道中の宿泊費や食費は賄わねばなりません。近くのコミュニティからの参加者は予定通りに到着したため、この人たちが待っている間の滞在費も追加が必要となったのです。つまりは、こういう大きな集まりを開催するための費用がさらにかさむということになり、上流のコミュニティの人たちのアクセスがさらに困難になるということでもあります。

リオ・ココは対岸のホンジュラスと自然国境をなしており、一帯には昔からミスキート人とマヤグナ人が住み着いてきました。川沿いには115のコミュニティがあります。リオ・ココはこれらの人々の生活とは切っても切り離すことができない重要な川です。そのリオ・ココの水位がどんどん下がり続けている原因は、まず上流地域での森林伐採があります。また、川沿いの住民による小規模な伐採や山焼きなども状況を悪化させています。リオ・ココの支流や沼沢地も水量が減っています。水源が枯渇しているせいで、人々は水を求めて遠くまで行かなければなりません。

加えて、川の水の汚染も大きな問題です。対岸のホンジュラス側で、昔はミスキートの人々が畑を作っていた川沿いの広い一帯が、木を切られ、大規模な牛の放牧場になってしまったことが、汚染の原因の一つです。ワspan側の問

題もあります。ゴミを川に捨てる人が多いこと、川で洗濯をし、石鹸分が川に流されることもその原因です。

ワンキ・タグニや他の環境団体などが植林をしたり、川を汚さないようにいろいろとキャンペーンをしています。それでも住民の意識を変えるのは容易ではありません。今回の研修で水問題のビデオが作られましたが、こういうツールが増えることは住民の意識化に大きく貢献するでしょう。

ワンキ・タグニの活動

ワンキ・タグニの活動に少し触れておきます。まずは、人権プロモーターの育成。これまでにワspanで50人に研修をし、現在は35人から40人が活動しているそうです。リオ・ココ流域にもワンキ・タグニが育成したプロモーターがコミュニティに一人はいます。これらのプロモーターが連絡を取りながら、何かあった場合に対応をとれるようにしているのです。私たちが到着する前日に15歳の少女がレイプされる事件が起こったのですが、その少女がまず相談に行ったのが人権プロモーターでした。プロモーターは医者に同行し、警察に告発しました。

リオ・ココの先住民女性フォーラムも開催しています。2014年までに6回の大会を開いています。毎回100以上のコミュニティから1000人を超える女性が一団に会する大イベントです。フォーラムでは、問題を共有し、その解決のために何をすべきかを話し合います。当局の代表なども招き、コミュニティのレベルと自治体レベルですべき提案を出します。そして女性たちのエンパワーメントにも大きな貢献をしています。

この他にも、前述した人権状況の改善のためのスマホ・プロジェクト、コミュニティ女性の生活改善のための菜園プロジェクト、植林プロジェクトなど多くの活動を行っています。

最新のプロジェクトは、ワンキ・タグニのメッセージをより多くの人たちに受け取ってもら

うためのラジオ局の開設です。米国の団体の支援を受けてアンテナや機材を購入することができたのです。私たちが滞在中は、その準備で放送プログラムをどうするか、などの打ち合わせをしているところでした。今月に入って、初めての放送をしたという知らせが届きました。

行政が動かない、警察も動かない、汚職が横行、女性蔑視の文化が根強い……このように活動を阻まれる要因がたくさんある中、資金不足に苦しみながらも、限られた資源と人材を最大限に生かして、創造的にいくつものプロジェクトを行っているワンキ・タグニ。地域の人々、特に女性たちのために活動を続ける彼女たちの活動には深い感銘を受けました。そのために、今後も私たちができる協力はしていきたい、と思った次第でした。

最後に、今回のビデオ研修は、特定非営利活動法人おおた市民活動推進機構が「世界の人びとのためのJICA基金」という助成金を取得して実施したものです。ワスパンに行き、研修を始めてから、参加者が予定より増えたなどで、予算が足りなくなり、RECOMより300ドルを緊急

支援したほか、中南米協働隊より3万円の寄付をいただいたことを報告いたします。

注：ヤタマとブルックリン・リベラ

RACNにはミスキート政党のヤタマがあり、ミスキート・コミュニティに大きな影響力を持っている。1980年代のコントラ内戦時代にこの地域は激戦地となったが、多くのミスキート人がサンディニスタ政権に反対してコントラに参加したという経緯がある。それがヤタマとなったものだが、当時のリーダーであるブルックリン・リベラが現在は地方ボスのような存在になって大きな権力を持っているのが実情で、ミスキート民族の権利を守るための政党という建前とはうらはらに暴力組織になっているようである。昨年9月にこの地域で土地をめぐる紛争が起き、死者が1名出るという事件が起こったが、この背後にはヤタマがいた。中央紙などマスメディアは、先住民族の土地を不法で占拠し農地にした太平洋岸のメスティソを追い出したというヤタマの声明をほとんどそのまま報道したが、実際にワスパンで話を聞くと、リベラらが、共有地であり売買できないはずの土地を勝手に売り、その後で入ってきた住民を暴力的に追い出したのだということであった。ミスキートのコミュニティ内でも、ヤタマのメンバーがコミュニティの女性を集団レイプした事件があったそうだが、被害者は報復を恐れて告発できないのだという。

水の重要性と食糧自給

コミュニティ課題を伝える

ドキュメンタリービデオ支援～ワスパン・ニカラグア

池田佳代（特定非営利活動法人おおた市民活動推進機構）

2011年秋の訪問から数えて4回目の今回は、コミュニティの課題を伝える短編ドキュメンタリービデオの製作と公開をサポートしました。この活動は、ニカラグアのカリブ海岸北部先住民族自治地域（RACN）のワスパンに事務所を置き、女性への暴力、食糧不足、自然環境の汚染や悪化などコミュニティの課題に取り組む女性たちの組織ワンキタグニの活動を支援するものです。この間に2回、東京大田区でコミュニティの課題に取り組む当方のワークショップで生まれた映像の交換とイ

ンターネット対話を通じた交流も行いました（2013年、2015年）。

訪問先のワスパンではこれまで、訓練不要な2日間の短編ビデオ制作手法であるデジタル・ストーリーテリング：DSTをコミュニティの活動家たちに提供し（2013年）、その翌年は彼女たちがその手法を周辺コミュニティの活動家たちに現地の言葉ミスキート語を用いて提供する研修をサポートしました（2014年）。今回はより発展的なドキュ

メンタリービデオを作りたいとの要望に応じて実践的な研修を提供しました（2016年）。

2 グループが切磋琢磨した10日間

日程は月曜から金曜までの5日を2週間連続した計10日間、参加者は過去の参加者2人を含む20-30代の女性7人、男性2人の計9人、会場はワンキタグニの事務所がある会議室やホールを使用してレクチャー、編集、録音、試写や上映会を行いました。初心者を対象としているため、ドキュメンタリーとは何か、どのように作るのかを作業段階ごとに説明し実習する形式で進めました。

まずは9人各自が企画を考えて提案し、その中から2つ選定し2グループに分けるところから始めます。2作品のテーマは、水の枯渇と水道設備の問題、食糧自給の意義と成功事例を取り上げました。

8日目の午前には荒く編集ができた段階の2作品を試写上映しました。集まっていたのは、テリトリー内で人身売買の被害が深刻な20の各コミュニティの代表と世話役、女性代表らを対象とした研修参加者たち60人で、コミュニティの課題をわかりやすく伝えており有効な方法を学んでいるとの賛意、自らの取り組みへの反省、有機農業に関する気づきなどが次々と声上がり、若い制作者たちの意欲と成果が承認される場ともなりました。

その翌日は二つのビデオをどのように活用するかについて話し合いました。学校での上映、車にビデオを積んでコミュニティで上映、地元の放送局や国内の放送局を通じた放映、国際機関との連携などさまざまな可能性を吟味する機会となりました。夕方には制作者たち自ら計画した上映会を開催し、テリトリー政府や市の行政関係者、インタビューの協力者（出演者）、研修生の友人や家族らを招きました。イベントは各自の役割分担に沿って運営され、制作者たちの表情はみな生き生きとしていました。観客たちは次々と作品への感想を述べ、制作者たちは努力が認められ誇らしい気持ちになったのではないかと思います。本研修の修了証を授与したあとで軽食とともに歓談するアットホームなイベントとなりました。



インタビュアー、カメラマン、ディレクターの役割に集中する食糧チームの撮影風景

最終日は研修の振り返りを行った後、全員で農場に出かけて気持ちのよい風を受けたり水浴びをしたりして過ごしました。慣れない作業に奮闘してきた日々の疲れを癒す機会にもなりました。そこはワンキタグニが10年かけて軌道に乗せたキサラヤ地区の菜園活動を他にも提供するための農業研修場を構想している場所です。夕方ワンキタグニの事務所に戻ったときには、なんとなく名残惜しい雰囲気に包まれました。すると一人が「なんだか中学生に戻ったみたい」とつぶやきました。毎日顔を合わせる仲間と協力してビデオをつくる活動はそんな気分させるのかもしれないと感じました。

タイトなスケジュールの1週目はなんとか乗り切ったものの、2週目になると一つのグループに遅れが出ました。するとそのグループは自ら居残って作業を続け、翌朝には遅れを取り戻すようになりました。その姿からは限られた時間の中でよりよいものを作りたいという意思を感じましたが、それはもう一つのグループにも伝染したのか、もう一つのグループは上映会の直前まで微調整を続けていました。二つのグループがあったことで相互に良い刺激を与え合うことができたことは、計画通りに作品を仕上げることもつながったのだらうと思います。

研修の環境は、食糧問題チームはビデオカメラがないためにデジタルカメラで撮影しました。ワンキタグニのパソコンはウイルス感染で使えなくなり、参加者のうち二人がそれぞれ私物のパソコ

ンを編集ように提供しました。参加者たちは炎天下の中を歩いて撮影して周ったほか、雨に降られて撮影を中断せざるを得ない体験もしました。扇風機を二つ回して室内に風を送りながら暑さに耐えてレクチャーを聞き、風が通る場所を探して編集作業にいそしみ、おやつや食事のタイミングで休憩を取り、体調を崩す人を出すことなく最終日を迎えることができました。様々な制限のある環境下でよく頑張ったと思います。



試写会の様子

ミスキート語ビデオをスペイン語でも

コミュニティの言語はミスキート語ですが公用語のスペイン語を人びとは日常的に使用しているため、ビデオの言語はどちらで制作するのか。検討した結果、第一に映像で伝えたいコミュニティの人びとの言語、ミスキート語と決まりました。インタビューに答える住民たちの多くがミスキート語で話していますし、ナレーションはミスキート語で作りました。ミスキート語がわからない人のためにスペイン語に訳した字幕をつける必要がありましたが、10日間の研修では間に合わず、編集担当が後日作業することになりました。

彼らが集合的に作業できないためfacebookを通じてフォローしましたがソフトや通信環境の不具合などで作業が進まない状況が1カ月ほど続きました。ワスパンを再訪問するのか、マナグアで合流するのかなど直接サポートする可能性を探る中、5月の末に編集担当の一人、ケニアがマナグアにいて時間があることがわかり、彼女の作業をサポートする機会をもてたことでようやく2つのにスペイン語の字幕がつけました。

ワンキタグニの研修参加者は、少なくとも2年間はそこで得たことを組織活動に生かす義務が生じるといいます。当方のコミュニケーション支援は3回目の今年で一旦締めくくりますが、ワスパン・リオココに山積する水や森林、人権状況などの問題解決に映像を活用したコミュニケーションが有効に働くことを引き続き応援したいと思いません。

新しい出会い

この地を4度訪問した私自身にとってワスパンは、アスファルトや排気ガス、そして寒暖の差に耐える必要がなく、美しい花や鳥、多種多様な植物や生物、街を自由に歩き回りのびのび捕食している家畜に出会える大好きな場所です。太平洋側にある首都マナグアはワスパンよりも気温が高く乾燥気味で周辺の砂漠化が危惧されているようですし、マナグアから150km北に位置する標高が高めのエステリでも水の減少を危惧する声が聞かれました。その度に、ワスパンの上映会で行政の人々がビデオの感想を述べる中で発した「水不足が命取り、無くなってから気がついて取り返しがつかない」という言葉が迫ってきました。地球の肺と言われる森林が維持され、コミュニティの人びとにとっての“よい暮らし”が創られるよう、私たちはこれからも関心を持ち続けるとともに、彼女たちの映像をより多くの人に伝えていきたいと思えます。

今回は、4月末にスペイン語字幕がつく前の2作品をJICAニカラグア事務所にて上映する機会を得て国際協力ボランティアの方々にもご覧いただいたほか、個別にDSTの取り組みやビデオの紹介、DST体験ワークショップ、日本とのネット対話や子どもへのDSTの上映など、当方の取り組みをニカラグアで活動する日本人、エステリに暮らす人びとに知ってもらえる機会を得るなど新しい出会いにも恵まれました。最後に、今回もレコムのご協力で活動ができましたことに感謝申し上げます。

ビデオの参照先

Importancia del agua <https://youtu.be/BhoNePvdAWQ>
seguridad alimentaria <https://youtu.be/lSaywwf98mg>

ホンジュラス

ベルタ・カセレスさん殺害をめぐる

recom会員 伊香祝子

はじめに

2016年3月2日深夜、ホンジュラス先住民民衆組織委員会 (COPINH) の創設メンバーのひとりベルタ・カセレスさんが、インティブカ県ラ・エスペランサの自宅で殺害された。家族は死の直後から、意図的な暗殺だと主張していたが、エネルギー開発株式会社 (DESA) の社員など4人が殺害容疑で逮捕された (5月) ことから、今回の事件がベルタさんの取り組んできたダム建設反対運動にかかわっていることはまちがいないようだ。

ホンジュラスに限らず、世界では、環境保護にかかわる活動家の投獄や殺害、脅迫などが増えている。2015年4月のBBCスペイン語ニュースの報道によると、2014年の1年間で殺害された環境保護活動家は116人 (前年比20%増) で、多い順にブラジルの29人、コロンビアの25人、フィリピンの15人となっている。この116人のうち、4割が先住民の人たちであるという。調査を行った団体グローバル・ウィットネスによれば、ホンジュラスは人口割合の殺害件数をもっとも多く、2002年から14年までに殺害された環境活動家は111人を数える。このような、危険な状況の背景にはなにがあるのだろうか。ベルタさん殺害の件から考えてみたい。

アグア・サルカ水力発電計画

昨年5月、ベルタ・カセレスさんはゴールドマン環境賞を受賞した。この賞は、毎年アフリカ、アジア、島嶼国、ヨーロッパ、南北アメリカの6地域からひとりずつ環境保護活動に貢献した人たちに贈られ、環境のノーベル賞との異名をとる。カセレスさんがこの賞を受賞した理由としては、アグア・サルカ水力発電計画を食い止めてきた功績が大きい。

ホンジュラスは国土の65%が山地で、水力発電は温室効果ガス排出量をおさえた「クリーンな再生可能エネルギー」 (DESAサイト) として注目され

ている。アグア・サルカ水力発電計画は、ホンジュラス北西部のサンタ・バルバラ県から中西部のインティブカ県にかけて流れるグアルカルケ川沿いに17のダムを作り、発電施設を建設する予定であった。

しかし、このグアルカルケ川は、ホンジュラスの先住民の最大勢力であるレンカ民族の聖地で、通貨単位にもその名を残す英雄レンピラがスペイン人に抵抗して戦った特別な場所であり、モンタニャ・ベルデ生物保護区まで数キロという位置にある。しかし、2009年6月のクーデター米国の関与が疑われている一後に施行された「水に関する一般法」、法令233号に基づき、2010年から13年にかけてダム建設計画が承認されたのである。 (<http://ejolt.org>)

この計画に対して、DESAは中米経済統合銀行 (BCIE) - 日本国際協力銀行 (JBIC) もここに対して融資を行っている - や国際金融公社 (IFC) : 途上国の民間セクター支援を行う世界銀行グループの機関、オランダ開発金融会社 (FMO)、フィンランド開発金融会社 (Finnfund) などから融資をうけており、京都議定書で定められたクリーン開発メカニズム (CDM) にもとづく投資もそこには含まれている。しかし、ベルタさんの死と、それにつぐネルソン・ガルシアさんの殺害事件 (3月15日) を受けて、現在ではBCIEを除き、融資を停止している。

COPINHとベルタ・カセレスさん

ホンジュラスには、レンカ、トルパン (ヒカケ)、ガリフナ (モレノ)、ミスキート、ペチ (パヤ)、タワカ、チョルティの7つのエスニック集団が存在し、1988年の統計では全人口の12%を占める。 (『ホンジュラスを知るための60章』桜井、中原編、明石書店、2014)

今回、アグア・サルカ計画の予定地となったホ

ホンジュラス西部から隣国エルサルバドルにかけての地域には、マヤ系といわれるレンカ人が多く居住し、その人数は両国合わせて10万人程度と推定される。ベルタ・カセレスさんは、レンカ人として、インティブカ県ラ・エスペランサで1972年3月3日に生まれた。母親のアウストラさんは助産婦・看護婦として働きつつ、コミュニティの女性たちとともに、国際的な組織に対し、コミュニティへの支援・人権の擁護を要求していった人だ。そんな母を見て育ったベルタさんは、若いころからエルサルバドル内戦で追われるゲリラをかくまったりしていた。そして、1993年に当時の夫らとともにCOPINHを創設した。(http://laquearde.org/)

COPINHは主としてホンジュラス南西部の先住民の文化の復興、自然環境の保護、生活の改善などを求める非営利団体(http://copinh.org/)であり、ブログ、SNS、動画などを使っての情報発信や啓発を行いながら、デモ、座り込みなどの直接行動により、森林伐採、鉱山、ダムなどの開発計画を阻止してきた。ダム建設に反対するメンバーのなかには殺害された人たちもあり、ベルタさんは死の直前にその一人の死の真相究明を求める申し立てを行ったばかりだった。

ホンジュラスの国内情勢と不処罰

国連薬物犯罪事務所が2014年に発表したところによると、ホンジュラスは国民10万人当たりの殺人件数が91.4人で世界最高であった。ギャングへの勧誘を恐れ、米国めざして子どもだけで出国する子ども移民も多い。また、米州機構国際人権委員会(CIDH)は2016年2月の報告書で、「女性や先住民族、アフリカ系のひとびと」などが、差別や経済的・社会的な排除の結果として、もっとも暴力にさらされやすくなっていること、こうした人びとの人権保護のために活動する人びとも危険にさらされていることを指摘している。

ホンジュラスでは2009年6月28日に軍部の後押しによるクーデタが起こり、同年11月の選挙で当選した国民党のポルフィリオ・ロボが現在大統領をつとめている。一時国外追放となったマヌエル・セラヤ元大統領が、米国の独立系メディアDemocracy Nowへのインタビューで語ったところでは、連れ去られた先は米軍基地だったという、



不可解なところも多い事件だが、国際的な人権団体アムネスティ・インターナショナルの報告では、このクーデタ後、デモに参加した前政権支持者たちが「警察と軍隊に恣意的に拘禁され、殴打と虐待を受け」「セラヤ支持者が逃げ込んだホンジュラス失踪者家族委員会の事務所に催涙ガス弾が撃ち込まれた」「6月のクーデタ以降、トランスジェンダーの女性の殺害が著しく増加したという証拠が出ている」そして「殺害の捜査記録はなにも得られていない」(「世界の人権2010-2011」)

このように、現在ホンジュラスで顕著にみられるのは、犯罪に対する免罪、不処罰だ。CIDHの報告書によれば、警察や軍警察自身が非合法的な暴力を行使することがあり、ときには組織犯罪にかかわっているという。そして、こうした不正を報道することも命がけだ。つい先日「人権を守るジャーナリストたち」による抗議行動が行われた(5/25、エラルド紙)が、2001年から現在までに起きた64人のジャーナリスト殺害事件の95%の犯人が捕まっていない。殺害されたジャーナリストたちは、汚職や麻薬取引、人権侵害についての報道を行っていたという。国境なき記者団の世界報道自由ランキングをみても、10年前の2006年には62位だった指数が、2009年128位、2010年143位と低下している。(2016年は137位)

3月のカセレスさん殺害の際、たまたまベルタさんの家に滞在していて自分も撃たれて負傷し、事件の目撃者となったグスタボ・カストロ・ソトさんの証言からも、不処罰の構造が見えてくる。

グスタボさんは、メキシコのNGO「Otros Mundos AC/Chiapas・FoE」のメンバーで、COPINHとのワークショップのために滞在中だった。ベルタさんが殺害された晩、当初は別の家に泊まる予定だったが、インターネットを借りるため、そして、彼女が一人で建設中の街区の自宅にいること

を心配して同行した。（ベルタさんには度重なる殺害や危害を加えるなどの脅迫があったにもかかわらず、自宅の警備はなされていなかった。）深夜、物音で目が覚めると、グスタボさんは部屋に侵入してきた男に撃たれた。ベルタさんの部屋に行くと、彼女は四発の銃弾を撃ち込まれており、瀕死の状態ですぐに亡くなった。（Intercept紙、2016年4月19日）



その後、グスタボさんは警察や検察官の取り調べを受けるのだが、「被害者どころか証拠物件」「ほとんど心理的な虐待」という扱いをうけ、自らも負傷していたにもかかわらず、丸一日以上たつてようやく医師の診察を受けることができた。また、取り調べのため約1週間ほとんど眠れず、それ以後もメキシコへの帰国を許されず、十分な身辺警護もない状態1か月近くホンジュラス国内に足止めされた。これに対し、異議を申し立てた弁護士は解任され一時停職処分をうけた。（naclaインタビュー 2016年4月28日）

このように、司法への信頼がほとんどない状況で、ベルタさん殺害犯と目される人びとが逮捕されたが、政府や軍・警察の関与も噂されており、家族やCOPINHはCIDHなどによる独立した捜査を要求している。6月15日には、公正な捜査をもとめる国際的なキャンペーンも行われた。

おわりに～環境と人権

ダムの予定地であるグアルカルケ川は、レンカ人にとって、レンピラの遺産であり、勇ましい女の子たち（niñas aguerridas）の精が宿っている場だとベルタさんは生前語っていた。（<http://laquearde.org>）自然から離れて暮らす人間にとって、川は単なる資源だが、その土地に住み、「時間をかけて地域文化を育ててきた」人たちにとってはかけがえのない存在となる。

「川の恵みを受けるためには人間側にもそれ相当の自己研鑽が要求されるとともに、川の恵みを人間だけのために収奪しないという“作法”が必要」（『技術にも自治がある—治水技術の伝統と近代』大熊孝、農文協 2004）と、ダム一辺倒だった近代日本の治水の見直しを提唱する大熊孝はいうが、この「川」を、「森」や「山」と置き換えても通用するだろう。自然とともに生きてきた先

住民族は、上記のような“作法”をもっともよく知る人びとである。そして、この人たちにとっては、生きる糧をうばう環境破壊は、自分らしく生きるすべを奪うものであり、彼らの人権をおかすものでもある。

「そんりさ」のバックナンバーをめくってみても、メキシコやエクアドル、コロンビアなど多くの国で、鉱山開発、森林破壊、エネルギー開発などをめぐって、国や開発にたずさわる国内外の企業と先住民族を含む住民が対立し、コミュニティのリーダーやメンバーが拘留され、脅迫される例はめずらしくない。

ILO169条では、先住民共同体の土地に開発計画が及ぶ場合は、コミュニティとの事前協議にもとづく合意が必要と定められているが、実際の効力は疑わしい。また近年では、自由貿易協定のために、外国資本によるプロジェクトの破棄が巨額な政府への賠償金要求につながることで、彼らの命を危険にさらしているという（前掲nacla、グスタボさんのインタビュー）。2001年の同時多発テロ事件以降、社会的な抵抗運動を行う人びとを「テロリスト」視する抵抗の犯罪化（criminalización de protesta）の傾向も影響している。

ベルタさんの殺害事件は、ホンジュラスの国内政治の弱点を露呈したが、同時に海外からの投資をうけた開発計画が現地の人びとの安全と無関係ではないことを見せつけた。自由貿易協定や、地球温暖化を防止するはずの再生可能エネルギー開発などが、持たざる者、土地と一体化して生きる人たちの生活をおびやかしている。このような世界で、ときには「投資する側」につながる日本に暮らす私たちにできることはなんだろうか。ベルタさんや彼女の仲間たちに対して敬意と連帯の意をあらわす方法を、今まで以上に真剣に考えるときがきている。

エルオレホン ゲリラと政府軍が 初めて共同作業をするコロンビアの村

BBC Mundo ナタリオ・コソイ 2015年11月26日

コロンビアは、カンボジアとアフガニスタンに次いで世界で3番目に地雷の事故が多い国であるが、政府と民間組織が進める地雷除去プロジェクトも数多い。

しかし、その中でも北西部のアンティオキア県のエルオレホンという小さな農村で、昨年5月から進められている共同除去作業のパイロット計画は特別である。この計画はゲリラとコロンビア政府が3年前からキューバのハバナで行ってきた和平協定の中に含まれているもので、軍の地雷除去部隊とコロンビア革命軍（FARC）のメンバーが、一緒に作業するのは、50年以上続いた紛争の中で、初めてのことだ。

彼らはこのプロジェクトが始まる少し前までは、道や山中で出くわせば、互いに撃ち合ったに違いない者同士なのである。しかし、ここエルオレホンでは彼らは武器を身につけていない。軍の部隊や警察が、少なくとも小銃やピストルで武装して歩くのが当たり前の農村地域にあって、本当にこれまででは考えられなかったことだ。

この村の住人は、軍とFARCが衝突するのを目撃するには、すっかり慣れてしまっている。だから、ここで彼らがひとつのテーブルを囲んで、一緒にビールを飲んだり、カードゲームをしたり、地雷除去作業をしているのを見るのは、この村にとって、とても良かった、と語った。

アルトカピタン

アルト・カピタンという丘は、結婚式や村の集会などが行われていた場所だった。また、村人の話では、そこは恋人たちが周囲の好奇の目から逃れて、愛を育む隠れ場所でもあった。しかし、この丘はこの地域の戦略的軍事拠点でもあったため、FARCはこの自然の見張り台を政府軍に陣取ら

れないように、ここに地雷を仕掛けたのである。エルオレホンとその周辺地域で、FARCが地雷をしかけたところはここだけではなく、それは住民にとって、常に危険と隣り合わせであるということの意味している。コーヒーの産地であるこの地域では、家々は緑の丘の傾斜地に点在しているので、隣家を訪ねることさえ危険である。

コロンビア政府の地雷対策局の調査によれば、この村があるブリセーニョ郡では、1990年から2015年の間に、51人が地雷の犠牲となっている。コロンビアでは、約200万個の地雷が撒かれたとも言われているが、実際にはどのくらいの数があるのかも分からないのだ。分かっているのは、この15年間に地雷やその他の爆破装置で11,225人もの犠牲者が出たという事だ。そして、様々な地雷除去プロジェクトがあるにもかかわらず、新たな地雷の敷設は続いている。地雷禁止国際キャンペーンによれば、FARCは民族解放軍のゲリラや麻薬密輸組織に関係する武装グループと同じく、国内の様々な場所に地雷を仕掛け続けてきた。

傷

村の中では誰も武器を持っていない、と保証されても、エクトール・ペレスはエルオレホンに行くのが怖かった。「わかるでしょう、私は、子どもの頃からずっと戦争の中で育ったのですから」彼にとって、政府軍はいつも敵だった。38年間の人生のうち26年間はゲリラだった。16歳の時にやり方を教わって以来、地雷を仕掛けてきた。だから彼の知識は重要だった。彼の記憶によって、どこで地雷を探し解体すればいいかを除去部隊が知りえたからだ。FARCの上官から、軍の兵士たちに地雷をどこに埋めたのかを教えるようにと指示された時、ペレスは悩んだ。しかし、「それは命令

だ。我々は兵士なのだから、命令に従わなければならない。」と納得した。

到着した時、彼は5か月前に政府軍の待ち伏せにあって負った傷がまだ完治しておらず、足が不自由な状態だった。そんななか、不信感を持ちながらも、彼のこれまでの敵と一緒に作業を始めたのだった。少しずつ、猜疑心は弱くなってきて、会話が始まり、お互いの身の上話をするうちに、「我々は友人になっていったんです」「我々はまるでふたりの兄弟のように話しました。」と彼は言った。

一緒に写真には許可が必要

エクトール・ペレスと除去部隊の兵士が一緒に写真を撮ろうとすると、兵士の方が、「だめだ、許可がないと」、と言ったのは驚きだった。写真を撮るには、政府の地雷除去プロジェクトを率いている上官に許可を求めなければならなかったのだ。写真には、FARCの地雷担当者エクトール・ペレスと、ここの42人の兵士と共に働いている地雷除去部隊の指揮官、二等軍曹のルイス・フェルナンド・ソーサが写っている。彼らが並んで写っているのは不思議な感じがする。現在では彼らが互いに打ち解けあっているのが見てとれるのだが、最初は、彼らにとっても慣れないことだった。

軍曹、お元気ですか？

ソーサにとっても、FARCと向かい合うのは気乗りがしないことだった。エルオレホンに行くときわかった時、現地に到着したら、誰が待っているのだろう、そして自分はどうしたらいいのだろう、と自問した。自分が握手を求めたら、彼らも応じてくれるだろうか。しかし、彼らは挨拶してくれた。「軍曹、お元気ですか」と。一緒に何カ月かやってみたが、共同作業はうまくいっていると彼は言った。同じく地雷除去部隊のメンバーは、ここでの関係について「普通の市民同士のようだ」と言う。だが、この共同生活で敵というものの解釈が変わったということではない、とも語った。

兵士の死

紛争が終わらない限り、そして長い年月が過ぎ去るまで、確実にこの認識は消えないだろう。エルオレホンでは、まだ暴力が続いていて、対人地雷も残っているのだから。このようにプロジェクトを注意深く行っているここですら、問題が起こった。最も重大だったのは、ウイルソン・デ・ヘスス・マルチネスの死だ。7月15日、地雷除去の作業をしている時に、地雷を踏んだのだ。アルトカピタンに登る道の途中に、十字架を立てて事故が起こった場所を記している。この事故で、しばらくの間作業の中止を余儀なくされた。プロジェクトを危うくしたもう一つは、この地域の武装した軍の存在だった。この軍がいなくなるまでは、FARCは警戒を解かなかつたからだ。

除去されず残される地域

また、他の武装グループも存在している。ゲリラだけではなく、政府が犯罪集団やバクリムと呼び、FARCが準軍事組織とみなしている一団も同じく危険な組織だ、と住民は指摘している。彼らもまた地雷を埋め、地域を地雷原にしたからだ。この地域の住民は、政府やFARCがエルオレホンで実行している任務にどれだけ誇りを持っているかが、未除去の地域が残っているかぎり危険は無くない、と主張している。

未除去ゾーンが残っているという声にどう応えていくのか、政府とFARCはエルオレホンで会議を重ねている。そして、彼らがもしここで地雷除去を続行すると決めたら、間違いなく住民から感謝されるだろう。しかし一方で西部のメタ県で計画されている同じようなプロジェクトの開始は、その分だけ遅くなることになる。

住民は、作業続行の決定を待つ間も、一エルオレホンにはまだ地雷が埋まっている危険地域が残されているが一少なくとも除去が終わったアルトカピタンには再び登ることができるだろう。そこで恋をしたり、結婚式をしたり、あるいはアンティオケーニョの素晴らしい眺望を楽しむために、平和が来る事を信じて。(訳・大西裕子)

『アステカ王国の生贄の祭祀—血・花・笑・戦』 岩崎賢

本書を書き上げるに至ったきっかけは、今から20年ほど前の個人的体験にさかのぼる。当時、大学のアンデス音楽のサークルで活動していた私は、本場の音楽を体験するために、夏休みを利用してペルー・ボリビアへの旅に出た。その途中で、ほんの数日、メキシコに立ち寄った。そこで、巨大なピラミッド建築物が立ち並ぶテオティワカン遺跡を訪れたり、様々な神々の像や宗教儀礼の道具が展示されたメキシコ人類学博物館を訪れたりするうちに、すっかりメソアメリカ世界に魅了されてしまった。そして、この古代世界を生きた人々の精神性を、なんとかして知りたいという強い気持ちを持ったのだった。それが今に至る研究生生活の始まりとなった。

メソアメリカ人の精神性を理解するための重要な鍵が、人を生贄として神々に捧げる行為、すなわち人身供犠であることは、古い文献に記された情報や、関連する考古学的遺物の多さからして明らかであった。そこで私は、このテーマについて記された主要な研究書に目を通したのだが、どの説明も、どこか自分にはしっくりこなかった。そこで何とか自分自身に納得のいくような解釈を求めて研究を続けていくうちに、約20年を経て、それが一つの著書という形にまとまったのが本書ということになる。

私がこの本で目指したのは、アステカ王国（紀元1325-1521）における供犠を中心的に扱いつつも、規模や細かい様式の違いこそあれ、メソアメリカ全域で古くから行われてきたこの宗教的行為の基層にある、最も根本的な世界観や宗教的感情といったものを明らかにすることであった。この目的を達するために重要な役割を果たしたのは、16世紀に記されたスペイン語やナワトル語（アステカ人が使用していた言語）の文献や、数々の考古学的資料、さらには古代のカラフルな絵文書、そして20世紀に作成された民族学的資料などである。以下にその内容を簡単に紹介する。

第一章では、アステカ人の宗教伝統の基本的性格について論じた。まず最初に、一年を通して行われる諸々の宗教的祭祀における人身供犠の事例



について、16世紀に記された古文書をもとに、その概要をまとめた。また52年に一度だけ行われる「新しい火の祭り」の事例もとりあげながら、実際にアステカ王国でいかに多種多様な生贄の儀礼が行われていたかを読者に簡潔に把握してもらえるように努めた。

章の後半では、人身供犠を含むアステカの多様で複雑な宗教的行為の基底をなす、世界と宇宙についての基本的なものの見方である「二元論的宇宙論」について論じた。「二元論的宇宙論」とは簡単に言えば、人間世界をとりまく大宇宙には、「熱い力」と「冷たい力」という二種類の力が充滿しており、この二種類の力の融和（聖婚）とせめぎあい（戦争）を通して、宇宙は均衡と調和の状態を作り上げている、とするような宇宙論のことである。

第二章ではアステカ供犠の実相に接近した。まず、この宗教的行為においては「神々に血を捧げる」という神話的テーマが際立っており、この主題を中心に従来のアステカ供犠論が展開してきたことを示した。しかしながら、そうした従来の議論が、しばしば《機械のアナロジー》と呼ぶべきものに基づいてアステカ供犠を説明してきたことで、この宗教的行為のリアリティに接近することを難しくしてしまっていることを指摘した。

第三章では、第二章で示した問題を乗り越えるべく、「神々から血を頂く」という神話的テーマの重要性を明らかにし、アステカ供犠をよりよく理解するためのアナロジーとして《大いなる生命体》という概念を提示した。この《大いなる生命

体》という考え方が最も明瞭に表現されている古代的図像の一つが、本書の図36で取り上げた「血を流す太陽神」の図像=写真=である。そこでは図の上半分に描かれた太陽神の体の各所から血液がおびただしく流出し、その血液は図の下半分に描かれた地上世界（H字の形をしている）に降り注ぎ、その地上世界の中央部では大地の女神が子供を生みだそうと

している。そして興味深いことに、この出来事全体は、トナカテクトリという大なる神の身体内部で生起する出来事として描かれているのである（この絵を取り囲む外枠がトナカテクトリ神



の外皮を表現している）。この図像が全体として表現しようとしているのは、大宇宙とは、それを構成する様々な事物——神々（太陽や星や大地の神々）や人間や動植物——の血液（生命的エネルギー）が循環する巨大生命体であり、供犠と生命的エネルギーの宇宙的循環を活発化させ、世界内の様々な事物の生成を促進しようとする営みであったということである。

このように、人身供犠という宗教的行為の基層には、宇宙を《大なる生命体》とみなす宇宙論が存在するということを示した後に、続く二つの章では供犠と強く結びついた二つの主題についての考察を行った。

第四章では、神話において「世界樹の開花」として象徴的に表現される諸事物の生成が「笑い」という神話的テーマと強く結びついていることを論じた。最初にアステカの宗教的な古代詩に見られる「タモアンチャンの花咲く木」という主題を検討し、「花」と「笑い」の主題の間には密接な関係があることを示した。それから「笑う神」テスカトリポカに関する事例を検討し、そこに「神の操り人形となって笑いながら踊る」という主題が認められることを示した。最後に現代メキシコ先住民の神話をとりあげ、ここでは「笑い」「歓

喜」「踊り」等の要素が世界創成の出来事と一体のものとして語られており、この創造性という点において、これらの要素が「世界樹の開花」の主題と結びつくものであることを明らかにした。

第五章ではアステカ人身供犠の最も重要な形式の一つであった「戦いの供犠」について考察した。最初に、アステカ人にとって最も重要な神話的アルケタイプの一つであった太陽神誕生神話が、アステカ人のいかなる歴史的経験の中から生まれたものであるかを論じた。それから、いくつかのナワトル語古代詩において、戦場で命をかけて戦うアステカ戦士たちの様子が、「クエポニ cueponi（咲く・発芽する・輝く・破裂する）」という動詞によって表現されており、戦いの主題が「開花」の主題と強く結びついていることを明らかにした。最後に、この「クエポニ」という動詞が、「炎の中に飛び込んで太陽となった神」の神話の重要な局面で使用されていることを示し、アステカ戦士たちはこの神話を究極的模範として、戦場において、歌いながら、踊りながら、そして笑いながら、宇宙創成の瞬間を華々しく生きようとしていたということ論じた。

以上が本書の内容である。人間を始めとする地上の生物は、太陽や月や大地の神々と血液（生命的エネルギー）を共有し、全体として宇宙は一つの《大なる生命体》として成立している、という観念は、植民地期以降もメキシコの先住民集団によって生き生きと受け継がれた。こうした宇宙と人間を一体のものとする宗教的感情は、20世紀初頭に勃発した《メキシコ革命》における、共同体の土地をとり戻すための先住民系農民たちの戦いの原動力ともなったのである（興味のある方は拙論「メキシコ革命と大地母神の神話」〔松村一男・山中弘編『神話と現代』リトン、2007年、401-423頁〕を参照されたい）。

最後になるが、本書には数多くの古代的図像が参考資料に含まれている。そして可能な限り多くのものを、（編集者に無理を言って）カラーで表紙部分（表・裏）に掲載してもらった。その大胆な図柄と色使いから、アステカ人の生き生きとした宗教的感情を感じ取っていただければ幸いである。（刀水書房、税込み2376円）

トウモロコシとインゲン豆のサラダ

Ensalada de Elote y Frijoles

暑い季節です。こんな時期には、朝食でも昼食でも夕食でも、おいしいサラダほどふさわしいものはありません。

メキシコには、多様な野菜やその他の材料をつかった、実に多くの種類のサラダがあります。

子どものころ、私たち兄弟がサラダをつくりました。トウモロコシやトマト、レタス、キュウリ、ピーマン、コリアンダー、豆などさまざまな野菜を使いました。

メキシコではインゲン豆はごく当たり前の食材です。1週間のどの曜日にも食べるし、豚肉や鶏肉、牛肉と組み合わせたり、シンプルにインゲン豆だけのスープにすることもあります。もちろんインゲン豆のディップは有名です。さらにメキシコではインゲン豆で実にさまざまなサラダもつくりま

す。トウモロコシは、数千年にわたってトルティーヤに使われ、パンのほか多くの料理に活用されてきましたが、おいしいサラダにの材料にもなります。

ほかのレシピで紹介し、みなさんご存じのように、トマトとトウモロコシはメキシコ原産です。



メキシコ人は、社会階層や経済的地位に関係なく、インゲン豆とトウモロコシを使ってきわめて多様なサラダを楽しみます。

マヤ人やアステカ人、その他の文明の人たちも、トウモロコシやインゲン豆、トマトで多様なサラダをつくっていました。

今回は、だれもが好きになれるサラダを紹介し、簡単に手早く準備できます。

■材料 4人分

- ・オリーブオイル 大さじ6杯
- ・赤いパプリカ（ピーマン） 1個
- ・黄色いパプリカ（ピーマン）1個
- ・レモン 1/2
- ・粉末ニンニク 適量
- ・スープのないレッドビーンズの缶詰 1缶（400グラム）
- ・トウモロコシの缶詰大 1缶（400グラム）
- ・トマト大 1/2
- ・塩
- ・コショウ 適量
- ・コリアンダーのみじん切り 適量
- ・タマネギ小 1/8?
- ・熟したアボカド 1個
- ・レタス 適量

■作り方

- 1) ピーマン（パプリカ）を洗って半分に切って種を取り出し、細切りにする。
- 2) タマネギを細切りにしたあと、苦みを除くため水につけてから絞る。
- 3) レタスを洗って長さ4センチほどに細切りにする。
- 4) トマトを洗って、2センチ角に切る
- 5) コリアンダーを洗ってみじん切りにする。
- 6) レモン半分の果汁をしぼっておく。種は取り除く。
- 7) トウモロコシとインゲン豆（レッドビーンズ）の缶詰をあけて、ザルの上で洗ってボールにあける。
- 8) アボカドを半分に切って種子をはずし、2センチ角に切る。
- 9) インゲン豆とトウモロコシを入れた容器に、細く切ったピーマンと刻んだコリアンダー、レタス、トマト、アボカド、タマネギを加える。
- 10) 適量の塩と粉末ニンニク、コショウ、オリーブオイル、レモンを加えて全体をよく混ぜる。
- 11) 冷蔵庫で1時間ほど冷やしたらできあがり。

メキシコ 教師デモに警察発砲 9人死亡

6月19日、メキシコのオアハカ州ノチストランで、教員組合のデモに警察が発砲し、9人が死亡、23人が行方不明、100人以上が負傷する事件があった。組合は、政府による新自由主義的教育改革は教師の数を減らし、先住民族のテリトリーから土地を奪うものであると反対し、道路封鎖などを行っていた。参加者によると、デモ隊を鎮圧しようとやってきた警察がいきなり発砲したという。オアハカでは10年前にも教師のデモが当時の州知事により弾圧され多数が殺された。(Democracy Now! June 22 2016より)

チリ 赤潮大発生で大きな被害

2月にチリで発生した赤潮は大きな被害を出し続けている。これまでは赤潮が発生しても魚介類が汚染されることはなかったが、今回は沿岸の魚介類が汚染され、4月に政府は1000キロに及ぶ太平洋岸一帯の漁を禁止した。これにより、この地域の中心であるチロエ島の漁師が大打撃を受けた。近年サケなどの大規模養殖が増えており、そのために伝統的な漁を続ける漁師の生活は年々苦しくなっている。これら伝統漁業を営む漁師らが、5月2日道路封鎖などを行って抗議。これに島の一般市民数千人も同調し、政府に有効な社会政策を要求した。9日には首都サンティアゴや他の都市でも連帯のデモが行われた。

チロエ諸島は、9181km²の面積に16万8千人の人々が住む。うち8割が漁業で生計を立てている。また、チロエ島はチリ人のアイデンティティと文化に大きな意味を持つが、中央政府からは見放されている。

政府は一家族あたり約1100ドルの補償金を出すことにしたが、それに漁師側が反発、2650ドル相当を要求している。

今回の赤潮は、サケの大規模養殖の問題点も浮き彫りにした。サケ養殖は、地元にはほとんど利益をもたらしていない。また海の生態系を破壊し、海水を汚染している。今回の赤潮の原因はまだはっきりしていないが、エルニーニョ現象の他にこの大規模養殖も原因だとの指摘もある。

(BBCMundo.com 4 mayo 2016, Inter Press Service 10 may 2016より)

ブラジル ギャングレイブで大きな反響

リオデジャネイロのファベイラ（スラム）で17才の少女が薬物を投与されて33人の男にギャングレイブされた事件が起こった。強かんの生々しい映像が、フェイスブックとツイッターで同時に流され、ブラジル中に大きな衝撃を与えた。この少女がテレビで証言して反響はさらに広がり、多くの都市で抗議のデモが行われた。犯人のうち2人が逮捕されている。政府はこの問題に強かん（現在は6年から30年の懲役刑）罪の重罪化で対処しようとしているが、それだけでは不十分と批判されている。男性の性衝動は抑えられないもの、女性にも責任がある、といった偏見がいまだに社会的に認められている背景そのものに問題があることも指摘されている。2011年には50600件の強かんが報告されている（ブラジルで10分に1件の割合となる）が、その多くが家庭内や知人によるもので、被害者が告発しないことが多く、実際にはこの10倍の事件が起こっているとみられている。(Inter Press Service 10 jun 2016より)

ウルグアイ政府、米タバコ会社に勝訴

2014年、米国の大手タバコ会社フィリップ・モリスがウルグアイ政府に対して同国で制定された反タバコ法で損害を受けたとして、世界銀行の法廷に提訴、2500万ドルの賠償を要求した。ウルグアイ政府は、生命や健康という国民の基本的権利は商業的利益より尊重されると主張していた。そして今年6月、同法廷はウルグアイ政府の言い分を認める判決を下し、フィリップ・モリス社に対して700万ドルの賠償とすべての裁判費用を支払うことを命じた。ウルグアイ政府は、国家の主権が認められたと歓迎。画期的で今後の同様の裁判の良い前例となると評価している。(BBCMundo.com 8 de julio 2016より)

猛暑の兆し満載の7月となりましたが、みなさまお元気でいらっしゃいますか。

5月の末に、レコムの総会を無事に終える事ができました。今年も関東の方から、遠路はるばる来て下さった方々、本当にありがとうございました。またワシントン在住の新川さんは現地時間の真夜中に2時間以上もスカイプで参加してくださいました。本当にお疲れさまでした。昨年度はいろいろな方面から、これまでよりも多くの支援金（助成金）を受け取る事ができ、それを資金として活動の幅を少し拡げる事ができました。本当にありがたい事です。時間的にも資金的にも、足りない事はいっぱいありますが、今できる事を実現するために、皆でがんばりましょう。今年度もどうぞよろしくお願ひします。

このそんりさがみなさんのお手元に届く頃は、日本では参議院選挙も終わっている事でしょう。私たちの未来も、この選挙で大きく変わるかもしれません。戦争の無い平和な毎日があつてこそその支援や活動です。この平和をずっと守っていききたいですね。（大西裕子）

次回「そんりさ」印刷作業は東京で11月 日（土）、
 発送は関西で11月 日（土）の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

Vol.156 グアテマラ戦時下性暴力裁判

Vol.152 グアテマラ視察報告

Vol.155 メキシコ・ナルコ街道ゲレロ

Vol.151 メキシコ・ナルコ回廊

Vol.154 グアテマラ揺るがす関税汚職

Vol.150 メキシコのアフリカ系

Vol.153 コロンビアを伝える旅

Vol.149 コロンビア・アワ民族

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』,資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・手紙も

しくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

82万2188円

<グアテマラ基金>

36万2757円

(2016年7月現在)